様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：21520739
研究課題名（和文）十九世紀ロシア帝国の文化統合におけるロシア正教の役割に関する基礎的研究
研究課題名（英文） Role of the Russian Orthodoxy in Cultural Integration of the Russian Empire during the 19th century.
研究代表者
下里　俊行（SHIMOSATO　TOSHIYUKI）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：80262393

研究成果の概要（和文）： 19 世紀前半のロシア正教神学は、ロシア帝国の文化統合の促進に資するべき正教独自の護教論を構築するという明確な課題意識を擁していたわけではなかった。そのうえ、多くの創造的なロシア正教神学者たちは、概して世俗帝国権力に対して一定の距離をとっていた。ようやく 1870 年代以降になって、ロシア正教のオリジナルな護教論の構築の試みが着手され、さらに同時代状況とロシア正教信条の独自性に合致した護教論の体系化が志向されるようになるのはおおよそ 1905 年以降のことである。その背景には、ロシア正教会内の右翼の過度な守旧主義・自民族中心主義に対する改革派神学者たちの危機感の高まりとともに、世俗の青年・学生たちの神学への関心の増大があった。しかし、西欧の護教論文献と比較するならば、非信仰者との対話の特別な回路としてのロシア正教独自の護教論文献の質と量は限定的であり、またロシア正教神学者たちの思想の傾向は必ずしも一枚岩的ではなく、彼らの間での深刻な対立も無視し得ないものであった。したがって、全体的には、多宗派・多民族の住民から構成されていた帝国の文化統合の過程に積極的に関与しようとするロシア正教の神学者たちの取り組みは極めて脆弱だったといえる。

研究成果の概要（英文）：Russian Orthodox theology in the first half of the 19th century did not have adequate sense of a mission to build the original apologetics of Russian Orthodoxy, which promoted the cultural integration of the Russian Empire. Moreover, in general, many creative theologians had distanced themselves from the secular power of the Empire. In the 1870s and later, construction of the original apologetics for the Russian Orthodox Church began to be undertaken. Moreover, a systematization of apologetics that might match the uniqueness of Russian Orthodoxy and the contemporary situation came to be oriented beginning approximately from1905. In the background, there arose a growing sense of crisis amongst reformative theologians about excessively conservative principles and the ethnocentrism of the right wing in the Russian Orthodox Church, as well as an increased interest in theology among secular youth students. However, compared with the apologetics literature of western Europe—the quality and quantity of apologetics literature of Russian Orthodoxy, as a circuit of specific dialogue with non-believers—was very limited. The trend of thought of Russian Orthodox theologians

was not necessarily monolithic, and there were several serious conflicts among them. Thus, in general, the efforts of theologians of Russian Orthodoxy to actively engage in promoting the process of cultural integration of the Russian Empire, which consisted of multiconfessional and multiethnic habitants, were very weak.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、西洋史
キーワード：キリスト教、護教論、帝国、文化統合、ロシア正教、多宗教、多民族

１．研究開始当初の背景

ソ連崩壊以降、それまで抑制されていたロシア正教会の活動が急速に復活しているなかで、ロシア正教と世俗権力との関係を帝政時代にまで遡って歴史学的に再考する課題の重要性が高まっている。

ロシアにおける帝国統治と正教会との関係についての従来の研究では、18 世紀にロシア正教会が世俗専制権力の官僚的統制下におかれて以降、19 世紀前半に国民教育省大臣ウヴァーロフが官製民族性理論「正教・専制・ナロードノスチ」において正教を帝国の文化統合の枢軸として明確に位置づけ、19 世紀後半には国内植民地化された帝国辺境での非ロシア人「異教徒」への宣教活動を積極的に展開したことが注目され、概して正教が帝国の文化統合における主要なファクターであったことが強調されてきた（フリーズ、ウィッタッカー、ゲラシ）。

しかし、他方で、従来から 19 世紀後半以降の反体制派知識人の中には正教聖職者身分出身者が少なくなかったことが知られており、近年では、帝政末期に聖職者の世俗分野での世俗社会に対するアウトリーチ活動が活性化したこと、さらに 1917 年革命期に正教高位聖職者層が君主制の廃止と臨時革命政府を支持したことが注目されている（ヘッダ、マンチェスター、バブキン）。

このように、帝国政府がロシア正教に期待した役割とは別に、正教会自身が帝国秩序のなかでどのような立ち位置を意識していたのかという当事者の視点からみれば、帝国の文化統合に対して正教が果たした役割は決して一義的なものではなかった。そこで、非キリスト教の諸宗教を含む多宗派・多民族から構成される帝国臣民を支配しつつ、同時に西欧を模倣した近代的諸改革を推進しつつあった 19 世紀ロシア帝国の文化統合過程に対して公的宗教としての特権的位置を占めていたロシア正教の神学者・聖職者たちが理

論面でどのような対応をしたのかを精密に検証することが重要な課題になっている。

２．研究の目的

本研究では、ボリシェヴィキ革命以前の 19 世紀初頭から 20 世紀初頭までのロシア帝国の歴史的変容の中でロシア正教会の聖職者・神学者が、いかなる宗教的アイデンティティを構築・再構築し、多宗派・多民族から構成される帝国の文化統合の過程においてロシア正教の理論活動はいかなる役割を果たしたのか、つまり帝国的文化統合を促進したのか、それとも攪乱したのかといった問題を、正教神学の一部門である護教論（アポロゲーティカ）に関連する言説を分析することによって解明することを目的とした。

３．研究の方法

本研究が主たる分析対象とした護教論とは、キリスト教神学において他宗派および世俗思想を「論駁・説得する」ことにより自己の教義の正統性を主張し、宣教活動を理論的に根拠づけるための学的研究の一部門である。本研究では、この護教論的言説において、ロシア正教神学者たちが、どのような論敵を措定し、いかなる論点と論拠によって論駁したのかを分析することで、ロシア正教が帝国の文化統合についてどのような自己了解をもっていたのかを解明する。具体的な史料として、チトリノフ、フロロフスキイ、スモリチなどの代表的な神学史・神学教育史・教会史に関する古典的通史を分析し、19 世紀前半の護教論的文献とともに、20 世紀初頭の代表的護教論神学者スヴェトロフが編纂した『神学のために何を読むべきか：体系的護教論文献案内』での書誌情報とそこに収録された主要文献の内容を分析することにした。

４．研究成果

（１）19 世紀初頭の護教論文献の基調

19 世紀初頭におけるロシア正教の護教論的文献は、いまだオリジナルな理論的構成を展開しておらず、ローマ・カトリック神学やプロテスタント神学と共通するキリスト教護教論一般の枠内にあり、他宗派・他信条に対して、ロシア帝国の支配的宗教として自らの信条の独自性と正統性を鮮明に展開するという課題意識は希薄であった。この時期、特に神学大学改革における哲学教育の路線的確執のなかで護教論的モチーフを観察することができるが、そこでの主要な論点は、キリスト教信仰と、古代教会教父文献が少なからず参照していたプラトン哲学・新プラトン主義との相互関係をどのように理解するのかという問題に集中しており、信仰（啓示）と哲学（理性）とを分離して把握するのか、それとも融合するものとして把握するのかをめぐって神学者・聖職者たちのあいだで隠然たる闘争が展開されていた。その背後には、教会主導の伝統的な聖書・聖伝の「真理」と、人知による自律的理性的思惟の「真理」との関係をどう位置づけるのかをめぐる立場の対立があったが、双方とも西方キリスト教の諸信条に対するロシア正教会の独自性の主張は依然として前面に押し出されていなかった。

①ロシア正教神学校改革における護教論的言説の動向

1808-1814 年の神学校改革における教育課程の内容、この改革の主導者であった世俗政治家スペランスキイ、宗務院総裁ゴリーツィン、高位聖職者フェオフィラクトおよび神学者フィラレートの宗教・哲学的見解、さらに神学大学招聘外国人教授フェスラー、その流れを汲む神学大学教授クトネヴィチ、ゴルビ

ンスキイの思想動向を分析した。その結果、この時期の改革の基本路線は、従来の諸地方の主教区主導の神学教育・聖職者養成の内容を中央集権的な国家機関である神学校委員会が統制することをめざすものであり、教科内容としては世俗一般教養とくに哲学・文学、歴史・地理・数学を重視し、従来のラテン語偏重を修正して聖書の原典購読とそのためにギリシャ語・ヘブライ語など古典語教育の強化をめざすものであったことが明らかになった。とりわけ哲学分野ではプラトン哲学を重視することで、従来のプロテスタント的なヴォルフ派哲学の影響を抑えようとする方針が掲げられた。しかし、現実にはロシア語教科書は不十分であったため、18 世紀以来、ロシアの神学校で伝統的に採用されてきたヴォルフ派の哲学教科書が継続して用いられ、それ以外の教科に関しても古典古代の文献やカトリック圏のラテン語文献を教科書に指定せざるを得なかった。また護教論文献に関してもラテン神学文献を教科書として指定していた。したがって、この時期の神学教育においてロシア正教独自の護教論の構築に関する正教神学者たちの課題意識は希薄であり、むしろ神学教育の水準を西欧並みに引き上げるという課題が優先されていた。もっとも神学大学の教育現場では必ずしも教科書通りの指導がおこなわれず、近代ドイツ観念論哲学（特にカント、シェリング）がかなり流入しており、ロシア語・ギリシャ語・近代西欧語教育および哲学・文学の分野での新しい課程は、神学校出身の新しいタイプの知識人を生み出す知的土壌を準備した。

②神学大学卒業生の自己形成史

改革後のロシア神学大学の教育が具体的にどのような個々の思想形成を促したのかを検証するために、ロシア正教聖職者の子弟でモスクワ神学大学の卒業生ニコライ・ナデージュヂンの「回想記」に基づいて、彼の自己形成の過程を同時代の神学校教育改革の動向と関連させ、彼の読書歴、人間関係の取り結び方を中心に分析した。ナデージュヂンは、旧来のヴォルフ派哲学に対抗してプラトンのイデア論とキリスト教の教義との統一的把握を志向し、後にモスクワ大学教授としてスタンケーヴィチ、コンスタンチン・アクサーコフをはじめ 1840 年代の世俗の独創的思想家たちに強い印象を与え、自分が創刊した雑誌ではベリンスキイを導き、そこにチャアダーエフの「哲学書簡」を掲載して政府や社会に衝撃を与えることになった。また神学・宗教哲学の自律性を志向していた当時の代表的な神学者・高位聖職者たちは、世俗官僚主導の宗教政策に対して一定の距離をおいており、1840 年代以降、世俗思想家とともに神学者のあいだにロシアの宗教哲学の独自性を志向する思潮も生まれたが、この思潮さえも帝国の文化統合を主導するという課題意識を内面化していなかった。総じていえば、19 世紀初頭に改革されたロシア神学校教育は、神学大学内部での形而上学的思考の水準を引き上げ、教え子たる教区司祭や神学校教師だけでなく世俗学校や世俗論壇で活躍した神学校出の知識人を通じて、帝国の統治体制に対する批判意識を内包したロシア文化史の創造的展開の一翼を担うことで、結果として、ロシア帝国の文化統合に対して攪乱的作用をもたらす要因の一つを促進したといえる。

（２）19 世紀後半の護教論文献の基調

スヴェトロフの「護教論文献案内」にもとづいて 19 世紀後半におけるロシア正教護教論に関する文献一覧を作成し、そこでの主要な論駁対象および批判の論点を総括的に分

析した結果、主要な論敵として危険視されていたのは、世俗思想として自然科学的唯物論、実証主義、スペンサー進化論、ダーウィニズム、そしてニーチェ主義であり、西欧での新しいキリスト教解釈・宗教思想としてのルナン、リッチュル、ハルナック、ロシアのトルストイであったことが明らかになった。他方で、20 世紀初頭にかけて、ロシア正教神学者のあいだで見解や立場の相違が深刻化しており、その中で、ロシア正教会のあり方を改革しようとする立場にたつ護教論者が、世俗思想家ウラジーミル・ソロヴィヨフの宗教哲学を高く評価するとともに、ロシア民族主義者や宮廷権力と結びついていた一部の教会勢力と鋭く対立していたことも明らかになった。

（3）19 世紀ロシア正教護教論の全般的動向

総括的にいえば、ロシア正教神学者が本格的に正教固有の護教論的内容の構成に着手するのは、1870 年代以降であり、その内容構成の体系性を志向し始めるのは、1905 年の日露戦争敗戦、第一次革命以降であるが、その背景には、同時代の実証主義と唯物論の蔓延に違和感を募らせていた世俗の青年・学生たちの神学、形而上学といった超越論的領域への関心の高まりとともに、君主主義・排外主義と結合したロシア正教会内の右翼勢力に対するエキュメニカルな志向をもった改革派神学者たちの危機意識の高まりがあった。しかしながら、専制権力と不可分一体となっていた宗教検閲が自律した護教論的言説の展開を阻害していた事情も作用して、本来、「異教徒」および非信仰者との対話の回路となる潜在的可能性をもっていた護教論に関わるロシア正教固有の文献の質と量は、ロシア正教固有のものとしては、西欧（特にプロテスタント）の護教論文献と比べて、限定的なものにとどまっており、西方キリスト教の護教論文献からの借用・翻案も少なくなかった。

（4）本研究の意義と今後の課題

従来のロシア史において、ロシア正教はロシア帝国の文化統合の支柱として叙述されてきたが、具体的な護教論的文献を精密に検討した結果、ロシア正教神学者たちは、帝国の文化統合という政策的課題を十分に内面化しておらず、むしろ、世俗権力に対するロシア正教聖職者の自律的な思考・心術の育成に大きな関心をもっており、また内部でも帝国の文化統合に対して、一方で、ロシア・ナショナリズムへの傾倒と、他方で、東西のキリスト教教会の統一を志向するエキュメニカルな傾向という、相対立する思想的ベクトルを表現しており、決して一枚岩ではなかったことを明らかにしたことにより、「ロシア正教」という単純な分析枠組みだけで 19 世紀ロシア帝国における宗教と世俗権力との相互関係を叙述することは一面的であることが浮き彫りになった。端的にいえば、20 世紀初頭にいたるまで、ロシア正教の聖職者・神学者たちは、当初ウヴァーロフら帝国の文教政策の立案者が期待したような帝国の文化統合におけるイデオロギー的ヘゲモニーを担うという課題を主体的に遂行することはなかったのである。

しかし、このような状況は、ロシア帝国の文化統合にかかわる特殊性というよりも、19 世紀～20 世紀初頭の西欧諸国における国民統合および帝国主義政策と支配的宗教勢力とのあいだの多義的な関係性という、近年の研究動向に照らし合わせてみれば、キリスト教が支配的宗教だった西欧の帝国主義諸国家にある程度共通する特徴であるとみなすことができる。

今後の課題としては、ロシア正教の思想的構成要素が、帝国の文化統合において主導的な役割を果たそうとした世俗の保守思想、および自由主義的な「国民国家」形成をめざした思潮にいかなる影響を与え、他方で、帝国の文化統合を目的意識的に攪乱することをめざした革命的思潮にいかなる影響を与えたかについて、個別のイデオローグの思想形成史に即して分析することが重要であり、特にロシア正教独自の護教論文献が登場し始める 1870 年代以降の動向をさらに精密に分析することが不可欠である。また、教会教区や辺境地域・海外での宣教活動といったロシア正教会の「実践的な取り組み」とロシア正教神学の「理論的動向」との関連について分析することも不可欠な課題となっている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①下里俊行、あるロシア正教神学生の自己形成史――ニコライ・ナデージュヂンの出会いと読書、スラヴ研究、査読有、第 58 号、2011 年、91-122 頁。
http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/47610/1/SS58_004.pdf

②下里俊行、ナデージュヂンによるプラトンの哲学体系の再構築とその哲学史的文脈、ロシア史研究、査読有、第 89 号、2012 年、3-22 頁。

〔学会発表〕（計５件）

①下里俊行、ニコライ・ナヂェージヂンにおけるキリスト教的プラトン主義の全体構造とその特質、「プラトンとロシア」研究会、北海道大学、2009 年 3 月 14 日、札幌市。

②下里俊行、ある神学生の自己形成――ニコライ・ナデージュヂンの邂逅と受容：1804 から 1835 年、「プラトンとロシア」研究会、北海道大学、2010 年 2 月 28 日、札幌市。

③下里俊行、ナデージュヂンの時間概念、「プラトンとロシア」研究会、北海道大学、2012 年 2 月 28 日、札幌市。

④下里俊行、論戦するロシア正教神学者たち――19 世紀後半～20 世紀初頭のロシア弁証論神学における「神の国」の意味――、「プラトンとロシア」研究会、北海道大学、2012 年 9 月 18 日、札幌市。

⑤下里俊行、ペテルブルク神学大学招聘教授フェスラーとプラトン、「プラトンとロシア」研究会、神戸市外国語大学、2013 年 3 月 8 日、神戸市。

〔その他〕

ホームページ等

http://researchmap.jp/simosato/

６．研究組織

(1)研究代表者

下里　俊行（SHIMOSATO TOSHIYUKI）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：80262393